

## ジャーナリストのジャーナリズム批判：フェルディナント・キュルンベルガーの実践的言語批判

塚， 雅志

長崎外国語大学外国語学部国際コミュニケーション学科ドイツ語ドイツ文化コース

<https://doi.org/10.15017/4970>

---

出版情報：文學研究. 101, pp.33-48, 2004-03-31. 九州大学大学院人文科学研究院  
バージョン：  
権利関係：

# ジャーナリストのジャーナリズム批判

——フェルディナント・キュルンベルガーの実践的言語批判——

堺 雅 志

はじめに

十九世紀ドイツの言語批判の大きな潮流のひとつは、国語育成に関わる実践的な言語批判である。もちろんすでに古代に端を発する認識論的言語批判は、ニーチエの「言語とはあらゆる現実と等価の表現なのか」<sup>(1)</sup> という言語への懐疑に見るまでもなく、終わりなき議論の様相を呈していた。その一方で、グリム兄弟やコンラート・ドゥーデン、ダニエル・ザンダース、グスタフ・ヴストマンなど様々な辞書編纂がなされたこの時代は、ドイツ語圏の統一国家を目指す社会的気運とも相俟って、国語育成に多方面から関心が寄せられた。ドイツ国家統一のプロセスに連動した国語浄化運動もその一例である。国語育成のスローガンのもとに展開された実践的な言語批判には、十九世紀にめざましい発展を遂げたジャーナリズムも大きく関わっている。歴史家ハインリヒ・リュツケルトは、ドイツ語の「同形性」、「正当性」、「純粋性」、方言からの隔絶、文学的洗練、大衆への普及、公的機能性、教養に裏打ちされた進歩発展を目指し、新聞を読むこと、政治化、都市化、鉄道交通すらもポジティブな要因と見なして、いわゆ

る十九世紀的な進歩が、言語の発展にも寄与することを高らかにうたいあげている。<sup>(2)</sup>しかし、楽観的な国語育成が目指される一方で、その弊害を指摘する実りある同時代人の声も聞かれる。国語育成の最も大きな対象はこの時代に形成される大衆層であったが、問題は新聞を代表とするマスメディアとしてのジャーナリズムの大衆への影響であった。これを憂慮する批判的な声の代表格はアルトゥール・ショーペンハウアーで、「おおよそ活字を読む人間の十分の九以上は確実に、新聞の他には何も読まぬ連中であり、その結果、彼らの正書法、文法、そして文体が新聞を手本に形成されるのはほとんど避けられない<sup>(3)</sup>」と大衆の言語使用に対する新聞の影響を危惧する。これは同時に新聞読者層の広がり<sup>(4)</sup>を物語っているが、なるほどショーペンハウアーの生きた時代は、新聞が出版の自由を獲得してゆくプロセスと重なり合っている。ショーペンハウアーから少し遅れて同様の批判を展開したのが、自身もジャーナリストであったフェルディナント・キュルンベルガー（一八二一—一八七九年）である。キュルンベルガーは、ルートヴィヒ・ベルネやハインリヒ・ハイネ、そして若きドイツ派が発展させたフェュトン（新聞の学芸欄）の伝統に名を連ねるフェュトニストで、いわばジャーナリズムのただ中に身を置いていた。にもかかわらず自らが属するジャーナリズムを内側から、その生来持つ傾向を暴いたのである。彼の「内側からの批判」から生まれてきたものは何であろうか。本論は、キュルンベルガーのジャーナリズム批判と実践的言語批判とのつながりを彼の著作を通じて概観し、言語を取り巻く当時の状況をも同時に俯瞰することを通じて、彼の批判の歴史的意義、すなわちジャーナリズム批判の急先鋒であるカール・クラウスの先駆者としての意義に光を当てようとするものである。

### 言語浄化運動批判

言語浄化運動の背景には一般に、外国語の流入という要因と、ある意味ではそれと表裏一体をなす国家意識の形

成という要因がはたらいている。ドイツ語圏においてそのような状況が生じたのは、三十年戦争、ナポレオン戦争、普仏戦争、第一次世界大戦、国家社会主義の台頭の時期であった。ドイツ語史の記述によると、言語浄化運動には三つの時代区分がある。まず人文主義・啓蒙主義の十七、八世紀、過渡期としての一七七九年から一八一九年、そして十九、二十世紀とがそれである<sup>(5)</sup>。そしてそのそれぞれの時代に他国との交渉が影を落としている。すでに中世以来の宮廷へのフランス文化の影響や、カトリックを通じてのイタリア、スペインからの影響、カルヴィニズムを通じてのフランスからの影響、バロック文学におけるスペイン文学からの影響など、様々な分野でドイツ語への外来語の流入が見られる。根底にはラテン語文化の伝統があり、その上にそれぞれの時代に、様々なロマンス語文化がドイツ語圏内に半ば無防備に入ってくる。十七世紀に入って間もない三十年戦争期には軍隊用語が軍隊制度ともに入り込む。この戦争はドイツ語圏を焦土と化すが、開戦間近の一六一七年には、イタリアの制度をモデルとしたドイツ語圏最初の言語協会、「実りをもたらす協会」[Fruchtbringende Gesellschaft(後に「椰子の会」)Palmenordenとも称する]が誕生している。爾来、この種の協会、団体は各地で結成されることになり、平行して、すでに入ってきていた外来語や、これから導入しようとする他国の思想、制度、技術などに関わる外来語のドイツ語化が、人文主義期ならびに、啓蒙主義期の学者や文士らによって企てられる。その成果を示す統計の一例を挙げると、一七四〇年頃は出版されていたあらゆる書物の約三割がラテン語であったのが、一八〇〇年時点ではほぼすべてのジャンルにおいて、ラテン語の書物の占める割合が一割に満たないところまで落ち込んでいる。十八世紀の言語浄化運動の担い手には、例外的にクロップシュトックのような極めて国粹主義的な外国語排斥論者がいるものの、ゴットシエートやアーデルングなど、規範的な国語を育成しようとしていた学者が大勢を占めていた<sup>(6)</sup>。

過渡期にあたるフランス革命からナポレオン戦争に至る時期になると、特にフランス革命のかたちをとったフランスの政治的成熟を目的の当たりにして、諸邦に分立し統一を欠いたドイツ語圏はその後進性をまざまざと見せつけ

られることになる。これが政治的な動きと強く結びついて、国語育成と言語浄化運動の気運が一気に高まってくる。「言語精神」と「民族精神」、「言語境界」と「国境」とがしばしば同一視され、言語国家、国民言語という古来より受け継がれた思想が政治的にも影響力を持つようになる。この時期の言語浄化運動は、辞書編纂にも携わったヨアヒム・ハインリヒ・カンペの活動を抜きには考えられない。すなわち、前時代のアーデルングが等閑に付していた外国語というカテゴリーに徹底的にメスを入れ、外来語のドイツ語化を実践したのである。標準ドイツ語を豊かにし、定着することがなかった外国語にドイツ語を充てるというプログラムに着手し、自身の編纂する辞書<sup>(7)</sup>で、三千語以上の外来語に関して独自のドイツ語化を図った。そのうち一割弱が定着している。ドイツ語における浄化運動のネストルといえるカンペ以来、言語浄化運動の流れは決定的な方向性を得、これが二十世紀に至るまで、国家意識と結びついたかたちで基調をなすことになる。いわばこの過渡期を境に言語浄化運動は、急進的な様相を呈するのである。この時期に生を受けたフェルディナント・キュルンベルガーは、従って第三の時代区分の最初期に位置している。

第三期以前の言語浄化運動は、ドイツ語による統一国家の成立、ないし国家言語の成立を目指して積極的に外国語のドイツ語化を押し進めようとしたこれまでの傾向に対して、第三期にはいると、普墺戦争によってプロイセンによるドイツ統一の道筋が半ば決定し、普仏戦争の勝利で小ドイツ、すなわちドイツ帝国が成立すると、言語浄化運動は統一国家という大きな目標を失うことになる。しかしながら逆に外国語に対するドイツ語の優位が唱えられるようになり、国語浄化は、運動というかたちに代わって様々な制度化の方向をとるようになる。一八八五年に創設され、一九四五年に一旦組織が完全に改編されるもののその名称で現在も続いている「全ドイツ言語協会」Allgemeiner Deutscher Sprachvereinがその代表的な例である。そしてこのような新たな動きを側面から支えたのが、十九世紀にめざましい発展を見た新聞、つまりジャーナリズムに他ならない。

さて、キュルンベルガーは言語浄化運動に関連して、「言語を豊かにしようとするのが、実質的には言語腐敗とならざるをえないとは！ しかも言語腐敗が外からしかやっつてこず、内からやっつてくる可能性はないと思つてゐるかのようである」(S. 142)<sup>(8)</sup>と皮肉を込めて評している。当時の言語浄化運動が過度に外国語排斥に傾いてゐたことがこの見解からも看取できる。しかし事実上、この時代にはドイツ語化できない様々な他国の制度、技術が流入してゐた。例えば小説家でもあつたキュルンベルガーの作品『アメリカに倦んだ男』*Der Amerikanide* (一八五五年)では、新大陸アメリカのすさまじい興隆に憑かれたヨーロッパ人が好んで使つた米語を小説中にちりばめ、当時のアメリカ熱を効果的に表現してゐる<sup>(9)</sup>。それは主に、金融市場や商業分野に入つて来てゐた外来語で、言語浄化運動のコインの裏側を垣間見ることが出来る。彼のいう「外から」の言語腐敗は、単に外来語の流入を意味するだけではない。当時の浄化運動の主たる傾向は、外来語をとにかく排除することを原理原則とすることであつた。けれども定着した外来語をわざわざドイツ語化することによつて、ドイツ語自体の歪みが惹き起こされる。それに加えて「内から」の言語腐敗がある。これを出来させる原因は、「ライプツィヒ書籍市のカタログに満載された強欲なハルピュイアのすべて、つまり教導、娯楽、暇潰し、靈魂不滅、学問、白痴化、これらのために書かれ、印刷され、出版され、裁断されるすべてのものをはるかに凌ぐほど、膨大で圧倒的な言語の消費量を誇る文献、すなわちジャーナリズムである。」(S. 142)一連の言語浄化運動の一翼を担つてゐた新聞は、外来語を取り入れる最大の窓口であつたばかりでなく、言語にさえ関わつてゐれば、あらゆる種類、あらゆる分野にわたつて、いわば無節操に言語を消費し尽くそうとする怪物であつた。極端な外来語排斥と結びついた国語育成を担いつつ、その一方で必要とあらば外国語であろうが何であろうが無批判に受け入れ、またそれ自体の内側にも腐敗の因を有してゐるジャーナリズムのこの捻れた構造が、キュルンベルガーをして言語批判としてのジャーナリズム批判を展開させることになる。

## 言語と新聞

ショーペンハウアーの死後六年経って出版されたキュルンベルガーの『言語と新聞』*Sprache und Zeitung*（一八六六年）のなかに、「ジャーナリズムは空気中の酸素のように破壊し、腐敗させ、溶解しながら、そしてもちろん新たな形成もするにはするが、書物言語という固形物に浸透する」(S. 142)という一節がある。「新たな形成」というポジティブな側面も含まれてはいるものの、全体のトーンとしてはジャーナリズムの悪影響が述べられている。キュルンベルガーがこの論の冒頭で、「外国の新聞が国内に入ってくる一方で、ドイツの新聞に対してはプロイセンの印紙税が布告された」(S. 141)ことに触れ、ヨーロッパにおけるドイツの新聞の後進性を揶揄している。しかし様々な制約にもかかわらず、事実上新聞の需要と供給は増大し、ドイツ語圏では、一八五一年から一八六〇年の十年間に四百八十二紙に上る新規の新聞が発行されている。<sup>(10)</sup>新聞の持つ影響力が、「空気中の酸素」に擬せられるほどはや避けようもないものとされるのも過ぎた比喻ではない。彼はさらにショーペンハウアーのことばを祖述するかのように、「個々の単語や慣用句全体の刷新、正書法や統語法の刷新、つまりあらゆる言語の雛形の刷新にジャーナリズムが専ら手をそめる」と述べ、「書物の文学が全部かかってもなしえないことを、いとも簡単に、遊戯さながら新聞の文学がやってのける」(S. 141)と、大衆の言語に対するジャーナリズムの影響範囲の広さのみならず、その作用の速さをも警告している。

彼の批判に特徴的なのは、ショーペンハウアーやニーチエの場合もそうであるように、流行語そのものや、語法上の誤りなどの実例を俎上にのぼせて正してゆくことである。特に彼が批判の矛先を向けるのは、新造語の類である。新聞の恣意的な造語や新語、流行語を取り上げ、それぞれの必然性のなさや滑稽さを露呈させる。例えば、「私

の若い頃は、Gegenwart (現在) と書いていたのに、今日ではJetztzeit (「今」と「時代」の合成語、「現在」の意) などと言われる。何ともおぞましい歯擦音であろう。人間の言語より蛇の言語にふさわしい」(S. 143) というぐあいである。同時代のニーチェもあるところで「一九〇〇年にはドイツの古典はもはや正確には理解されないであろうし、高貴な「Jetztzeit」のごろつきの隠語以外の言語はもはや分らないであろう」と、ショーペンハウアーのこゝとばをそのまま引きつつ引用符付きでこの語を取り上げている<sup>(11)</sup>。キュルンベルガーよりもやや時代を下ったニーチェのこの引用の背後には、ドイツ語には国民的文体がなく、統一的文体もないことへの嘆きがある。この引用に続けてニーチェは、軽佻浮薄に流れてゆく言語の行く末を危惧する。「実際に、すでに今、ドイツの言語審議官や文法家たちは、最新の雑誌で次のような意見を述べている。すなわち、我が国の文体にとつて、我が国の古典作家たちはもはや見本となりえない、なぜならば彼らには、我々がなくした非常に多くのことばや言い回し、統語的接続が見られるからである<sup>(12)</sup>」ニーチェのこのことばからも、古典よりも雑誌の類が広く行き渡り、あろうことか重んぜられてさえいる風潮が看取できる。

造語に関するキュルンベルガーの批判の具体的な例をもうひとつ挙げておくと、機能動詞を使った熟語表現の単語化がある。現在の辞書には見出語として収録されているが、「着手」を意味する「Inangriffnahme (In Angriff nehmen)」や、「考慮」を意味する「Inbetrachtungnahme (In Betracht nehmen)」といった合成名詞が新聞雑誌に見られるようになったことに触れ、「今に、へ生活ニ入り込ムコト」Inseleben-tretung (Ins Leben treten) などと書かれるようになるであろう」(S. 143) と皮肉を込めて語っている。この他にも例えば複合動詞「übergehen」に関して、分離、非分離となるのは、「好みと気分に応じてではなく、その意味の変化に応じて」(S. 143) であると、実際に当時の新聞では珍しくなかった分離、非分離の恣意的混交を難じている。彼の批判対象には、先に言及した言語浄化主義者に見られる人口に膾炙した外来語を不必要にドイツ語化することや、ドイツ語で充分意味の通じることばを銜学的に



外来語に置き換えるような行為も含まれる。こういった新聞の使う恣意的造語や言い回しがフレーズと化し、「生活ニ入り込ムコト」が、キュルンベルガーの憂慮するところであり、彼を実践的言語批判に通じるジャーナリズム批判へと向かわせた動機に他ならない。そして、批判すべきもつとも大きな対象のひとつは「フレーズ」であった。

### フレーズ批判

キュルンベルガーのいう「フレーズ」とはいったいどのようなものであろうか。『言語と新聞』の中では次のように言われている。奇異な言い回しや誤記は、それ自体正される運命を持っていて、いわばこれらは自らによって批判されると彼は言う。けれどもこれよりも「もつと目立たないかたちで、醜さ、あるいは矛盾を隠し持っているが、〔……〕ジャーナリズムの子にして、誰からも悪意を抱かれずに口語や書物言語によつてすでに口まねされているフレーズや慣用句である。」(S. 144)ここで彼は、目にとまったこのようなフレーズの代表的なもの具体例を六つ挙げ示している。キュルンベルガーのフレーズ批判の本領は、個々のフレーズに対する具体的批判なのである。

一、「算定不可能な射程」*unberechenbare Tragweite*。結果や作用に、「大きな」とか「重要な」とか形容して満足していた時代が懐かしい。空間における距離で、時間における歴史的作用の無限性を比喩的に表現しようとしているのであろうか。(S. 144f.)

二、「代表する」*vertreten*という表現は、議会政治からの借用語である。ある役者がハムレットを「代表する」とか、ある画家がデュッセルドルフを「代表する」とはどういう意味だろう。(S. 145f.)

三、「(危険な徴候が)示される」*angezeigt*という術語は、臨床で使われていたが、近年のコレラ、チフスの流行

で医者と患者の行き来が増え、医者の口から文章語へ、それから何でも刷新することに飢えた喉、つまりジャーナリズムの言語に受け継がれたようである。事態の個別的な相貌をよりいっそう豊かに描写するような表現を選ばなければいけないところで、今日ではあたりかまわずどこでも、すべてが「示される」か「示されない」かである。思想を殺すフレーズであり、口語を腐敗させ、お粗末で単調で退屈にする。(S. 147f.)

四、「美しき努力」*ein schönes Streben*。このフレーズを使うことで、ジャーナリズムは文化批評家然と振る舞っているが、芸術 (*Kunst*) とは能力 (*Können*) が語源であるのに、「努力」というのはなぜか。努力が美しいとはどういうことか。(S. 148f.)

五、「使命」*Mission* とは元来神に託された使命であり、モーゼやオルレアンの乙女に使うことばであるのに、ジャーナリズムはとうとう自分たちの仕事、つまり毎日ができる限りおもしろくする努力にも使うようになった。(S. 149f.)

六、「(芸術家などを)雇用する」*engagieren* と言う代わりに「(くどいて)迎え入れる」*gewinnen* とドイツ語では言っている。なんと驚くべき翻訳か。(S. 150f.)<sup>(13)</sup>

これらの例はさらに三つに類型化される。すなわち「扇動」の言語、「弛緩」の言語、「儀礼」の言語の三つである。新聞がこれらの言語を使えば、それぞれ次のような事態となる。「扇動」の言語(例えば「および五の *unberechnbare Tragweite* や *Mission*) は、「誇張され、飾り立てられ、誇張法の濫用を招きかねない。」(S. 152) 「弛緩」の言語(「および三の *vertreten* や *angezeigt*) は、「思考をちよっと楽にし、思考の簡略表現を發明し、ふさわしい箇所では差し支えない表現を無数のふさわしくない箇所で繰り返す危険を冒す。」(S. 152) 「儀礼」の言語(「四および六の *schönes Streben* や *gewinnen*) に関しては、「繊細な婉曲表現よりもぶっきらぼうな率直さを好むドイツ語に

は、エチケットの学校などとうてい耐えられないであろうし、はるかな昔から心地よい言い回しをふんだんに持ち合わせているというよりは、むしろ田舎者よろしくそれを欠いている」(S. 152f.)とし、この種の表現の不適切を嘆いている。

けれどもここで視野に入れておきたいのは、これらの三類型の肯定的な側面をも挙げていることである。「扇動」の言語にも、「跳躍、輝き、炎と生命、詩的活力と独創性を獲得する可能性があり、言語を至福の段階へ高める可能性もある」とする。「弛緩」の言語も、それが作り出す慣用的文体は、上記の難点を除けば悪いものではないとする。「儀礼」の言語にしても、「我が国の言語環境を取り巻く新聞が、貢献することもありえようが」(S. 153)と非現実話法を使いながらではあるが、希望の見解を開陳している。キュルンベルガーの新聞から拾い出した具体的なフレーズの批判には、フレーズの持つ具体的難点を明らかにし、それによって、処方もまた提供しようとする姿勢が窺われる。しかし現実には、その処方では追いつかないほどのフレーズ的大量生産がジャーナリズムによって押し進められていた。

ところで『華々しき新聞の文体』*Die Blumen des Zeitungstils* (一八七二年)というエッセイの中で、彼は「フレーズ」を「ターム」との関連で説明する。タームはそれ自体としていかなる専門的活動にも直接必要なものである一方で、「フレーズは過剰なものである。しかし過剰自体は必要なものであって、フレーズは少なくとも間接的には必要である。フレーズは言語と戯れ、言語を飾る。けれども遊び、飾る欲求は、生理的必要と同様に、人間の本性に本源的に存在するものである。」(S. 156)このように迂遠な理屈を使ってフレーズの必要性が揶揄される。続けてこう言う。「いかなる専門的活動も専門概念を表すために飾りのことばをも作り出す。つまりタームのためにフレーズを作り出すのである。否、ほとんど専門語を必要としないような専門的活動までもが、このような飾りの必要に駆られてやはりフレーズを作り上げるということになる。これが事の真相である。」(S. 156)この種の「専門的

活動」こそジャーナリズムなのである。思考を簡略化し、紋切り型にとどめてしまうような言語の雛形こそがフレーズに他ならない。そしてジャーナリズムはまた、文学の言語をもフレーズにしてしまう可能性を孕んでいる。

### フェュトン批判

「フレーズを使うことで、ジャーナリズムは苦労もなく文化批評家然としていられる」(S. 148)のであるならば、ジャーナリズムにとっては過去の言語遺産を都合よく利用することが便法である。キュルンベルガーは言う。「ジャーナリズムの中にヴォルテール、ゲーテ、ジャン・パウルの言葉を読むがよい。それは四方八方から革命の波をかぶっている。ジャーナリズムは、全く別のものを彼らの言葉を使つていかにももつともらしく仕立て上げる。」(S. 143) ヴォルテール、ゲーテ、ジャン・パウルの言葉を剽窃し、いとも簡単に改竄してしまうジャーナリズムの姿が浮かび上がる。またあるところでは、注意深い読者ならば、「ゲーテやレッシングのことばから、毎年一部が失われてしまうことに気づくであろう」(S. 151) と言ひ、かつはまた「レッシングやゲーテのことばが生きた言語であることをやめてしまう」(S. 154) と言ふ。これらの発言の根幹には、偉大な詩人、作家たちのことばを、自分たちに都合のよい文脈にはめ込み、「ふさわしくない箇所を繰り返し」、それらをもフレーズと化してしまうジャーナリズムの危険性をすでに察知しているキュルンベルガーの慧眼がある。新聞には芸術文化を扱う欄としてフェュトン (Feuilleton) があり、現在でも新聞を構成する重要な一要素をなしている。「フェュトン」ということは自体は一八〇〇年、フランスの『論争新聞』*Journal des Débats* に付いていた、批評家アベ・ジョフロワの文学芸術雑感の付録の紙片 (Feuille) に由来するとされ、歴史は比較的新しい<sup>14)</sup>。もちろん啓蒙思潮期に教養新聞、雑誌が誕生して以来、劇評や書評はすでに、ゴットシェートやレッシングによつて確立されてはいたが、個々の芸術作品の批評

から学術・文化政策に至るまで文化全般に関わる事柄を網羅的に扱うひとつのジャンルとなったのは十九世紀になってからであり、ドイツ語圏でフェュトンというジャンルを確立したのはベルネやハイネである。キュルンベルガーもその流れをくむ者であるが、フェュトンが成立して間もない頃にフェュトン批判の先駆けとして、次のように自説を展開している。

新聞は我が国の言語を育成することもできるが、不格好にすることもできる。否、それどころかどちらか一方であらざるをえない。というのも新聞が言語をあるがままにしておくことはできないという事実以上に確かなことではないのだから。新聞雑誌は結局のところ書物とは全く違うように語らざるをえず、大衆教化の、書物から新聞雑誌への移行はとどめがたい。ラマルティエヌはいみじくも、今までは新聞雑誌は書籍の中から生まれてきたが、今日では書籍が新聞雑誌の中から生まれてくると言った。次第に小説は新聞小説となり、学術論文は大衆に対する講演となり、学問は通信文となる。新聞に携わる人々は次第に自分の寄稿文を集めて書物のかたちにし、再び自分の著作とするのが当たり前になっている。新聞記事の再録以外の何ものでもない書物はすでに数限りない。文章語は次第にこう呼ばれるようになるであろう、新聞語と。(S. 153)

いわゆる新聞連載小説がドイツで生まれたのはこの時期であつた。<sup>(15)</sup>新聞雑誌から書籍へという手続きは、出版構造のひとつの転換点である。芸術家の作品が、新聞の都合に合わせて書かれるのは、フェュトニストである彼にしても全く奇異に思われたであろう。これは人間と文化全体、ひいては言語全体に関わる構造の転換である。けれどもこれが今日ではごく自然のことであるのは、ジャーナリズムが我々の気付かぬうちに浸透してきた結果に他ならない。

## おわりに

キュルンベルガーは『言語と新聞』の末尾近くで「ジャーナリズムは、言語への腐食作用という点で、空気中の酸素に比せられる」(S. 154)と繰り返して、ジャーナリズムと酸素との違いをこう言い表わす。「酸素は盲目の自然力であるが、新聞雑誌は意識的な理性を持った人々によって書かれている。彼らは自分たちのすることに注意を向けることができるし、自由な選択によって、破壊することもでき、構築することもできるのである。」(S. 155)すなわち彼は理性的な書き手の自由な選択による「新たな形成」や「構築」の可能性に一縷の望みを託していたのである。ジャーナリズムによる大衆化の波はますます大きくなり、それにつれていわゆる「教養」の享受者は特権的教養階級から大衆へと移行する。大衆が文化の享受者となってゆく一方で、その教化という問題が浮かび上がる。そしてジャーナリズムにも深く関わる国語育成への気運が高まるのであるが、これを一括りに歓迎すべきこととするのではなく、これに疑問を投げかけ、検証することも重要である。理性的な書き手であれば、その大衆を真の意味で教化することもできるはずである。けれども、キュルンベルガーの目に映じたジャーナリズムの実体は、そこからはかけ離れたものであり、ジャーナリズムの渦中にいながら彼にとつては批判対象でしかなかった。この意味で、キュルンベルガーが展開したジャーナリズム批判は注目に値する。実践的言語批判へと通じる彼のジャーナリズム批判は、国語育成が、言語腐敗と紙一重であることに警鐘を鳴らすに十分であった。

しかし、ひとたび堰を切った流れはとどまることなく、瞬く間に世界をくまなく覆ってしまう。十九世紀から二十世紀にかけての世紀転換期に湧き起こった類をみない言語への危機意識は、ジャーナリズムの隆盛と、それがもたらした国語育成の問題性、すなわち言語腐敗の可能性の増大という歴史的文脈なしにはおそらく考えられないで

あろう。すなわち、認識とその対象との乖離を、言語と事物との乖離として捉える時代感情の淵源には、フレーズという言語の平板化が極めて大きな要因として存在しているからである。フレーズは対象をそのままに描こうとするものではなく、対象を閉じ込めるといふ構造を持っているがゆえに、認識の対象をねじ曲げ、矮小化し、本来あるべき姿とは別な何ものかを作り上げる危険性に常に晒されている。このフレーズというフィルターを通した「認識」のあり方が問題視されるのである。

以上見てきたキュルンベルガーのジャーナリズム批判、具体例に即した実践的言語批判は、歴史的に見てひとつの萌芽であった。カール・クラウスはキュルンベルガーを、「オーストリアがかつて得たもつとも偉大な政治的作家」と評している。<sup>(16)</sup> ジャーナリズムの渦中にいながらその体質を問い続け、抽象的言辞を弄するのではなく常に具体的に批判する態度に極めて親近性を感じていたことが、稀代の諷刺家であり、皮肉屋であったクラウスをしてこのような賛辞を言わしめたに相違ない。キュルンベルガーの展開したジャーナリズム批判は、言語浄化運動批判、フレーズ批判、フェュトン批判という三つの層を成していた。この三つの層から成る言語批判は、キュルンベルガーがジャーナリズムに対してわずかに抱いていた期待、すなわち「新たな形成」の可能性を全く認めず、はるかに先鋭に、はるかに徹底的にジャーナリズム批判を展開した二十世紀のカール・クラウスの活動に受け継がれ、豊かな実りをもたらすことになる。

注

- (1) Friedrich Nietzsche: *Über Wahrheit und Lüge im aussermoralischen Sinn*. In: Nietzsche Werke. Hg. von Giorgio Colli u. Mazzino Montinari. Berlin 1972, Bd. III-2, S. 372.
- (2) Heinrich Rückert: *Die deutsche Schriftsprache der Gegenwart und die Dialekte*. In: Walter Dieckmann (Hg.):

- Reichtum und Armut der deutschen Sprache.* Berlin 1989, S. 271-305.
- (3) Arthur Schopenhauer: *Parerga und Paralipomena, zweiter Band.* In: ders.: *Sämtliche Werke.* Hg. von Paul Deussen. München 1913, S. 577.
- (4) 詳しきは拙論「カール・クニウスとシヨープンハウマー」(「シヨープンハウマー研究」第七号、二〇〇二年、五九〜七五頁)の六〇〜六二頁参照。
- (5) Alan Kirkness: *Das Phänomen des Purismus in der Geschichte des Deutschen.* In: Werner Besch u. a. (Hg.): *Sprachgeschichte. Ein Handbuch zur Geschichte der deutschen Sprache und ihrer Erforschung.* Berlin 1998, Bd. 1, S. 407-416.
- (6) この語彙の言語浄化運動の歴史に関する記述は、主に前掲書および後述の二書に依拠している。August Langen: *Deutsche Sprachgeschichte vom Barock bis zur Gegenwart.* In: Wolfgang Stammer (Hg.): *Deutsche Philologie im Aufriß.* Berlin 1962, Bd. 1, Sp. 931-944, 1018-1022, 1142-1147, 1180-1183, 1198-1204 und 1279-1281. Peter von Polenz: *Deutsche Sprachgeschichte vom Spätmittelalter bis zur Gegenwart.* Berlin 1999, Bd. 3, S. 264-293.
- (7) Joachim Heinrich Campe: *Wörterbuch zur Erklärung und Verdeutschung der unserer Sprache aufgedruckten fremden Ausdrücke.* Hildesheim 1970.
- (8) Ferdinand Kürnberger: *Feuilletons.* Hg. von Karl Riha. Frankfurt a. M. 1967. *ドイツ語の語彙*の「尾の頁数のみ」を参照。
- (9) この小説については、ドイツ語に於けるアメリカ受容の文脈で、山口知三「アメリカとドイツの「ハンタマー」」(「文学」第二十六号、二〇〇〇年)を詳しう。
- (10) Karl d'Ester: *Zeitung und Zeitschrift.* In: Wolfgang Stammer (Hg.): *Deutsche Philologie im Aufriß.* Berlin 1962, Bd. 3, Sp. 1284.
- (11) Nietzsche: *Unzeitgemässe Betrachtungen I.* In: ebd., Bd. III-1, S. 217 und Schopenhauer: *Über die, seit einigen Jahren, methodisch betriebene Verhütung der Deutschen Sprache.* In: Arthur Schopenhauer's *handschriftlicher Nachlaß.* Hg. von Eduard Griesbach. Leipzig 1891-1893, S. 58. 因みに「Duden & Klappenbach の語彙」は



Jetztzeit は見出し語として記載されている。

- (12) Nietzsche: ebd.
- (13) 以上挙げた例の中で、二、三、五は、現在ではここで論難されている意味で使用されている。angezeigt に関して言えば、臨床で使われるような意味としては十八世紀のアーデルングの辞書の記述には見られるが、それ以降の辞書にはグリムの辞書を除いて見られない。
- (14) d'Ester: ebd., Sp. 1291f.
- (15) ドイツにおける最初の新聞連載小説は、ウージエヌ・シュエーの『永遠のユダヤ人』の翻訳であり、一八四四年から一八五五年にかけてライプツィヒのブロックハウス社が発行していた新聞 *Allgemeine Zeitung* に掲載された。この成功から各紙に新聞小説の連載が広まった。d'Ester: ebd., Sp. 1292f. und Walter Jens (Hg.): *Kindlers neues Literaturlexikon*. München 1998, Bd. 16, S. 170ff.
- (16) Karl Kraus: *Die Fackel* (in 12 Bänden). Frankfurt am Main, Nachdruck von Karl Kraus: *Die Fackel* (in 39 Bänden). München 1968-1976, Nr. 214-215, S. 5.